

D 21 住宅内空間の構成変化と食事・炊事・配膳などの生活諸過程における部屋などの使われ方からみたその要因（和歌山県日高郡中津村船津の場合）—農村住宅の住空間の構成と住生活の変容に関する研究 大阪工業大 塩谷寿翁

目的・方法：畿内およびその周辺地域における農村住宅の住宅内空間の構成変化を昭和30年代から50年代に亘る時期の前後でとらえ、その要因を日常的・非日常的生活の諸側面から解明しようとする。小稿では、標題の集落を対象にした実態調査<sup>(1)</sup>の結果を基に、①「原初型」<sup>(2)</sup>の平面構成の変化動向を探り、②変化の規則性および要因の一端を食事・炊事・配膳における部屋など<sup>(3)</sup>の使われ方の変容の動向から事例的に追究する。

結果の要約：①支配的な主屋の間取り型は、四間取（田の字型）および三間取（喰い違い三間取り型<sup>(4)</sup>）であり、②昭和40年代の後半期以降に、床上部分の部屋配列を保ち主に土間の内側が床上となる建築更新が著しく進行している（詳細は別に公表の予定）。③それらは、床上の食事・炊事空間の形成を主たる要因としており、食事空間と炊事空間の一体化は85%（39戸のうち33戸）に及び、51%（同20戸）が床上化している。また④食事・炊事空間の形成には、食事のしかたの様式的な側面での転換が強く関係しており、⑤床上化以前の時期では食事空間と炊事空間とが一体化され、食事空間が床上の部屋（ダイドコ）から土間に移って椅子坐となり、その後⑥土間部分の建築更新を伴い床上の食事・炊事空間と成る、変化の過程が存在する。さらに⑦主屋の外部（表庭・裏庭）にも広がっていた炊事の諸行為（材料処理、食器・調理具の洗い場）の場および主屋・別棟・付属建物に分散していた食品（米、野菜など）の収納場所は主屋内側の炊事場に集中する傾向にある。

(1) 期間は昭和59年8月から現在に及んでいる（全世帯116戸のうち39戸を精密調査）。(2) 昭和20年代における調査対象集落の農村住宅の主屋の標準的な平面形式。

(3) 床上の部屋部分と土間部分。(4) 畿内の四間取りに先行すると考えられている型（林野全孝「近畿の民家」（相模書房）、昭和55年、210～213頁、第四章第三節 喰い違い三間取り型の史的考察、による）。